

館山支部だより Vol.101

<支部連絡窓口>
千葉県隊友会館山支部
事務局(代表)川村 巖
〒294-0032 館山市笠名1357
TEL 0470-22-0230



冬を彩る
クリスマスローズ
(社宅の庭先にて)

コロナ禍に翻弄された一年ですが、現在なお世界的な感染拡大が危惧されており、ワクチンを待ち望むよりも日常生活の中で三密回避の努力をさらに強化継続することが先決問題ではないでしょうか。

さて今年最後の支部だよりをお届けする時期になりました。コロナ禍の一日も早い終息と新たな社会・日常生活の定着を望んでやみません。
<支部長>

支部の活動概要

<<10・11月活動実績>>

- 10.3(土) 千葉県護国神社秋季例大祭清掃奉仕(千葉市)
- 10.10(土) 旧海軍予備学生戦没者慰霊祭(安房神社)
- 11.20(金) 館山航空基地殉職隊員慰霊祭(隊員代表のみ)
(隊友会本部・千葉県隊友会からお花料呈呈)
- 11.28(土) 11月支部役員会(コミセン)

<<12・1月活動予定>>

- 1月初旬 21空群司令への年頭表敬
(OB三団体代表、自粛の方向で検討)
- 1.30(土) 1月支部役員会(コミセン)

点描・コロナ禍での実行動 (南極観測支援行動の例)

南極観測支援艦「しらせ」横須賀出港、南極へ直行!

今月6日に第62次南極観測支援の任務を帯びて砕氷艦「しらせ」が横須賀を出港した記事が全国紙に掲載されておりました。ご多分に漏れず180名の乗組員は事前にPCR検査を受けて出港後2週間は近海を周航して健康状態を確認の上、20日には横須賀で観測隊員を載せて南極に向けて出航しております。今回は乗組員の家族ほか関係者による見送りが岸壁ではなく、横須賀港内の棧橋から沖合を通過する「しらせ」を見送ることになっております。

参加する観測隊員も人数を40名に縮小し、従来豪州のフリーマントル(帰路はシドニー)まで飛行便で直行しそこで乗艦して南極へ向かっておりましたが、今回は往路・帰路とも豪州への寄港(補給・休養)なしの南極直行・往復という行動になっております。恒例の歓送会も自民党本部の音頭?で関係者だけによるオンライン歓送会の形で行われ、コロナ禍の下、平素の訓練に限らず、実行動においてもすべてが異例づくしと言えましょう。また行動日程も例年より40日短い109日間に短縮され、2021年2月22日には帰国する予定になっています。

<川村 記>

レクイエム

10.27 飯田 轟和 会員(海) ご逝去(享年88歳)

支部の理事役として長年の精力的・献身的なご尽力とともに会員として最後まで隊友会へのご理解、ご協力有難うございました。
謹んで哀悼の意を表しご冥福をお祈りいたします。 <支部会員一同>



遺跡発掘調査補助員の募集について

県隊友会を通じて、次のような「遺跡発掘調査補助員の募集」に関する依頼がきております。

- 作業内容 専門の調査員が行う遺跡発掘調査の補助作業
- 作業場所 成田市周辺の遺跡
- 条件等 年齢69歳以下、時給1,520円、月15日まで(自由選択)
別途、事前に主催側が行う説明会を受け参加の「登録」が必要
<主 催> (公社)千葉県教育振興財団(四街道市)
※関心のある方は、支部事務局まで申出ください。
<連絡先> 館山支部事務局 TEL 0470(22)0230
メール g_marine@f5.dion.ne.jp

<支部事務局>

<参考> 蟹田村の山腹に残る州ノ埼海軍航空隊(「州ノ空」)の戦闘指揮所壕跡
19年末に作戦室や通信区画等とともに3万人を収容できる兵員防空壕とも壕内通路で通じる「戦闘指揮所壕」を完成させ、築城施設整備のモデル(模範)として全部隊に布告されている。
航空兵器整備教育を本務とする州ノ空は戦闘部隊ではないが、本業(整備員の養成)の完遂とともに作戦部隊に対する人的・技術支援等、後方支援部隊として「広義の戦闘」に徹することを強く意識したものであろう。

寄稿:「香港・一国二制度が消滅する日」

この夏、中国の「全人代」で香港国家安全維持法(「国安法」)なるものが成立しております。デモが続く香港の現状に、これを国家的な法律で取締まろうとするものです。「全人代」とは中国で毎年国内各地の代表者を集めて華々しく行う共産党政府の最高機関「全国人民代表大会」ですが代表者会議とは名ばかり、「国安法」という重要極まる法令を(議論もなにもなく)いとも簡単に決めてしまうのです。日本では考えられないことです。「国安法」は成立と同時に施行され、香港デモの指導者クラスが数名逮捕拘束されたことはニュースのとおりです。

「三権分立」の危機に瀕する香港(議会)

そもそも香港デモは、昨年6月に「逃亡犯条例」の改正案に反対する香港市民の反中抗議デモに端を発し、香港区議選で民主派が8割の議席を獲得して圧勝したことによって勢いを増したのですが、今年6月には冒頭に述べたとおり「国安法」が成立し、民主派議員の立候補の禁止や(議事妨害を理由に)民主派議員らの逮捕、さらには民主派議員の資格取り消し、コロナ禍を理由に議会選挙の1年延期など、民主派勢力の排除に向けた強固策を立て続けに打ち出しております。これによって香港議会(立法会)は民主派が消滅して親中派が圧倒的多数を占めるという逆転現象を生じ、異例な事態になりつつあるのです。

中国共産党がいとも簡単に成立させた「国安法」は、「中国共産党への批判や香港の独立を主張」することを「違法」として掲げ、香港の統制を強化する目的で定めたものですが、これによって香港の「三権分立」が大きく後退し、「一国二制度」の要である「三権分立」の消滅によって香港返還(1997年)以来続けられてきた「一国二制度」が形骸化するのも時間の問題と見られています。

他国の出来事とは言え、残念としか言いようがないですね。香港のニュースに日本の共産党の何とか言う委員長がメディアのインタビューに応じて、「人道・人権を無視したあるまじき暴挙!」と憤慨しておりましたがテレビでイキマクだけでは何の効き目もないのです。自分たちの身内じゃないですか、中国に乗り込んで直接談判してみたいかが? 全然お呼びじゃないようですね。

中国自治区・少数民族の問題

以前紹介したことがありますウイグル自治区での虐待やチベット自治区の国境問題、さらにはあまり話題に上らなかったモンゴル自治区への大量の漢民族(いわゆる中国人)の集団移入(モンゴル人を上回る数)等々、香港とは異質の問題ですが、中国が抱える少数民族の問題についても、中国共産党政府が推し進める露骨な政策には、香港問題と共通項があるような気がしてならないのです。
<<中国の近現代史に関心を持つ会員(海)>>

「海軍築城」・新説「赤山地下壕の運用構想」

<前号から続く> 建設時期に限らず、この赤山については「マンモス防空壕」とか「地下要塞」等々諸説芬々(ふんぶん)、いずれも根拠のない憶測に過ぎない。十数年前、赤山に関する記録資料を探し求めて何回となく防衛研究所等を訪ね歩いたが徒労に終わり、(赤山そのものの)現地調査に望みを託した。手製の測量器具?を頼りに赤山の内部構造を立体的に調べ、赤山周辺の軍の構築物等(掩体壕ほか)との関係から、「赤山をどのように使おうとしたのか」その運用構想について筆者の推論を紹介したい。

4階層構造の赤山地下壕

現在公開されているのは1階部分のみであるが、この赤山は全体として「4階層構造」と言えよう。1階に比べると2階以上は規模的にも狭く、まだ各階相互に貫通していない状態であるが、自前で作製した2階以上の平面図(略図)を透視図的に1階部分に重ねて見ると、各階相互に極めて接近した箇所があることから、各階相互の貫通も時間の問題(あと数日)であることが分かる。日中関係の悪化に伴い赤山山頂に設けられた監視所(S11年)へも4階から通じさせようとした形跡も見られる。ただ壕内の掘削残土の処理状況などから4階層構造は当初(19年初め)の構想ではなく、終戦直前(4月頃)になって、次に述べる運用構想とも絡んで2階以上の工事計画が急浮上したものと考えられる。

赤山地下壕の運用構想

赤山地下壕は、空襲時に空からの発見と攻撃を防ぐための避難壕には違いないが、海軍には「戦闘指揮所」の考え方があり、戦闘配置の艦橋を思い浮かべてもらいたい。航空部隊に限らずすべての陸上基地にとって戦闘指揮所の構築が急務であった。
S20. 5に再編された館山航空隊に対して、「水上特攻(「震洋」などの水上突撃隊)の進出支援」という新たな任務が加えられている。ますます激化が予想される空からの攻撃の下で「最小限の航空作戦機能を維持し任務を遂行」するためには、赤山地下壕の立体構造のハード面とともに、赤山近辺の地理地形及び構築物(誘導路、掩体壕など)の配置とリンクさせて考えるところに、「赤山地下壕の運用」を推測する上でキーワードがあると思う。下記にそのキーワードとなるような事項を列挙する。 <<内は筆者が推測した区画
※4階部分:出入口部に設けられたコンクリート製の構築物(潜望鏡のように使用時に展張するタイプの通信・レーダー(電探)アンテナの設置台とも考えられる) =><<情報中枢、作戦室・戦闘指揮所エリア>>
※3階部分:宮城地区(現自動車教習場近く)に設けられた滑走路(非舗装、急速補修に有利)や猿山の麓に分散構築中の航空機機道掩体(小型機用格納壕)や民家を縫うように設けられた誘導路などの状況を一望(把握)できる。=><<航空機発着管制エリア>>
※2階部分:1~2階間の緩傾斜の幅広い通路(部署発動時の配置への即応に適) =><<兵員居住エリア>>
※1階部分:物資等搬出入の利便性=><<応急治療所、発電機区画、弾薬・物資等格納区画、武器等修理区画等>>

追記

旧軍の記録資料が少ない中、州ノ埼海軍航空隊の戦闘指揮所壕(写真参照)については、S19年末に他部隊に先駆けて竣工させ運用も始められており、当時の教官や予備学生等の戦後の有意な証言(回想記等)も数多く残されていることから、「戦闘指揮所」について調べ、考える上でのモデルとして参考になると思う。
<自称地域史探索マニア その27(4/4)>